



〈連載(278)〉

香港港の再訪(その1)



大阪府立大学大学院 海洋システム工学分野教授
池田 良穂

ベトナムのハノイ工科大学の船舶工学部門との研究交流を行った後、その帰路に香港に寄ることに決め、久しぶりに、3日間、香港港の船を追いかけることができた。

訪問日程中は、ちょうど香港での学生デモの真最中で、日本を出る前に周りからは大丈夫かと心配されたものの、日本の学生運動最盛期に学生時代を過ごした筆者にとっては、香港の学生運動にも少し興味があった。しかし、香港の街に到着してみると、週末の繁華街はたくさんの家族連れやカップル、外国人観光客でごった返しており、レストランも満席のところが多く、不穏な雰囲気は微塵も感じる事がなかった。ホテルのフロントで聞いても、ごく一画で学生が活動しているだけで、他の地域は大丈夫とのことであった。日本での報道は、まるで香港全体が混乱しているかのような印象を与えるものだったが、全く、それとは違って街には普通の日常が流れていた。そういえば、40数年前の学生闘争の時も同じような状況だったような気がする。

香港を訪れた目的の1つが、昨年完成し

たクルーズターミナルを見ることだった。香港には客船ターミナルとして長い歴史のあるオーシャンターミナルがあるが、ここは大型船だと2隻しか着岸できない。これからの現代クルーズのアジアでの急発展を見越して、香港は市街地にあった空港が郊外に移転して遊休化した飛行場の滑走路に大きなクルーズターミナルを建設した。それがカイタック・クルーズターミナルである。

ただし、香港を起点とする本格的クルーズを実施するスター・クルーズは、オーシャンターミナルを使っており、訪問した初日には7万総トンの「スーパースター・バード」と、4万総トンの「スター・パイセス」の2隻が埠頭の両側の岸壁に着岸していた。オーシャンターミナルの内部は一大ショッピングモールとなっており、屋上でもイベントの準備が行われていて入れなかったため、海の見える窓のあるレストランを探してようやく腰を落ち着けて、船の写真撮影ができた。客船埠頭にショッピングモールがあるのではなく、モールの外側が岸壁としても活用されているといった印象だった。

かつて、ここから「QE2」や「クラブメド2」に乗船した頃とはちょっと雰囲気が変わっていた。ただ、このターミナルは、香港の中心街のど真ん中にあるため、寄港するクルーズ客船の乗客にとっては人気のスポットで、滞在3日目にはプリンセスクルーズのクルーズ客船もここに着岸していた。



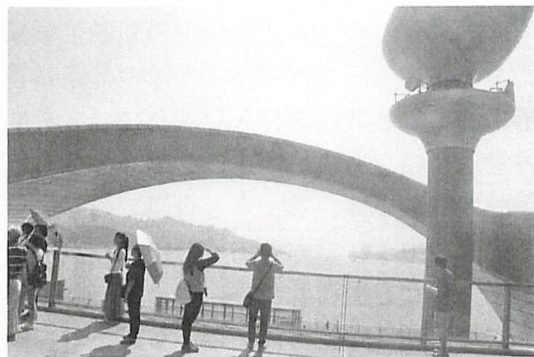
オーシャンターミナルと停泊する「スター・パイセス」

新しいカイタック・クルーズターミナルは、巨大ではあるが、中心街からはかなり距離があり、周りはまだ開発途上の状態で、しばらくは香港発着の超大型クルーズ客船の利用が中心になるものと思われる。特に、欧米のクルーズ各社は、中国人客をメインターゲットにして、香港起点の台湾や沖縄へのクルーズを始める準備を進めているという。こうした新しいニーズに対応して、このクルーズ施設は作られている。今回の滞在3日間に、同ターミナルには1隻もクルーズ客船は着岸していなかったが、驚いたことに観光客はたくさん来ていた。同ターミナルの屋上が庭園となっていて無料開放されているため、ツアーバスがたくさん訪れるためだ。クルーズ客船が来なくても、市民や観光客で溢れる仕組み作りが、オーシャンターミナルでも、この新クルーズタ

ーミナルでもしっかりとされている点は注目すべき点であろう。



新クルーズターミナルの屋上庭園



新クルーズターミナルの屋上庭園の先端から香港港の東入口を望む

日本ではカジノを中心とした統合型リゾートが注目され、カジノ解禁に向けた法案作りも進んでいるが、香港では海を渡って隣のマカオに行ってカジノをするのが一般的だ。しかし、もっと気軽にカジノができることで人気を呼んでいるのが香港起点のカジノ客船だ。このカジノ客船の多くは岸壁を使わず、港内のポンツーンにつながっていて、乗客は小型船で送迎される。香港におけるカジノ客船の運航は古くからあるが、滞在中に5隻のカジノ客船の姿を見ることができた。

当初は、今回の訪問の目的にはカジノ客船は入っていなかったが、夕食のためのレ

ストランを探して繁華街を歩いている時に、突然に客引きに誘われた。手にはクルーズ客船の写真の入ったパンフレットをもち、今晚出るといふカジノ客船へ勧誘だった。見渡してみると、そこかしこに同じようなパンフレットをもった女性が乗客の勧誘をしている。説明によると、夜に出航して、船内には宿泊施設もあり、翌朝に香港に戻ってくるとのこと。



繁華街に立ってカジノ客船の勧誘をする女性(左の2人と右端にも1人)

翌朝、予定を変更して、さっそくカジノ客船を探しに香港の港を回った。ホテルの窓からは、それらしき1隻が九龍のオーシャンターミナル近くの棧橋に着岸しており、そしてカイトック・クルーズターミナルの近くの海上にも双胴らしき客船がいるのが確認できた。

そこで、まず、オーシャンターミナルの2つ隣の棧橋に行き、停泊している金色に輝く「スターリー・メトロポリス」(元ソ連の客船「カレリア」)を撮影。1982年にフィンランドのヴァルチラ造船所で建造された船で、すでに船齢32年だが、まだまだがんばっているよう。

次に、カイトック・クルーズターミナルの屋上に上ってみると、周りの海上に4隻のカジノ船がポンツーンに係留されていた。

双胴型の船はSemi-SWATH型の「チャイナ・スター」(2万総トン)で、前身は2005年に建造された「ラディソン・ダイヤモンド」で、こちらもフィンランドの同じ造船所の建造船だ。揺れない船ということで大きな話題を集めて竣工したもの、同型船の建造はなく、今はカジノ船になっているのが一寸さびしい。

「メトロポリス」は、日本の長距離カーフェリー「しれとこ丸」がその前身。ギリシアで活躍した後、香港に売られてカジノ客船となった。

いかにもクルーズ客船らしい姿をしているのが「レックス・フォーチュン」。1万総トン弱の洗練されたスタイルのクルーズ客船として1974年に建造されているから、もう船齢は40年のベテランだ。最後の1隻は「ニュー・エンペリアル・スター」。12500総トンのRORO型客船で、元ソ連客船「ドミトリー・ショスタコビッチ」。1980年にポーランドで建造された5隻の同型船の一隻で、ソ連時代にはドイツ等の旅行社にチャーターされて格安のクルーズを提供していた。

今回は、マカオ航路の高速旅客船や、香港港内および周辺離島を結ぶ小型客船について紹介をしたい。



スターリー・メトロポリス



チャイナ・スター



レックス・フォーチュン



メトロポリス



ニュー・エンピリアル・スター

新
刊
案
内

『最新 船舶職員及び
小型船舶操縦者法関係法令』

本書は7月末日までの法令改正に対応している。前の版から七年ぶりに発行されたこともあり、収録されているほぼすべての法令に改正が入っている全面改訂版と言ってよいだろう。特長としては、標題の法律の通達と海技免状更新関係の事務取扱要領が2つ収録されており、いずれも官報には載っていない。大型船・小型船を問わず船舶職員養成に関わる機関や免許更新業務に携わる海事事務所、造船所にとって必要な

法令である。この最新版を備え置くべきであろう。



A5判／616頁／定価 本体5700円(税別)
発行所：(株)成山堂書店
〒160-0012 東京都新宿区南元町4-51
TEL：03-3357-5861 FAX：03-3357-5867
メール：order@seizando.co.jp